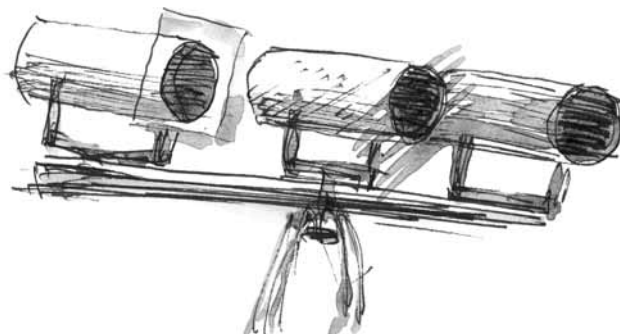


特集Ⅱ  
座談会  
演劇部



- 日 時 平成21年7月4日(土)
- 場 所 アルカディア市ヶ谷

---

- 出席者 沖 隆一郎(高4回)  
富永 守雄(高5回)  
佐藤 恵子(高40回)  
小池ちひろ(高58回)  
佐藤 春明 先生

---

- 編集部 司会 高橋 誠(高26回)  
記録 清水 史枝(高27回)  
写真 久島 士郎(高28回)

司会 高26回高橋でございます。まず本日の座談会の主旨ですが、同じ部活で世代を超えて交流をしていただくところがございます。

演劇部は何回か消滅と復活を繰り返してきたわけですが、60年近くたった現在でも高田高校で正式な部として活動している、文科系では貴重な存在です。

最初に自己紹介を兼ねて、簡単に演劇部との関わりをお話いただけますか。まず、創部に関わった沖さん、富永さんからよろしくをお願いします。

### ■ 女人禁制で始まった演劇部の活動

沖 高4回の沖でございます。私が果たし



て演劇部の部員だったと言えるかどうか、よく思い出せません。と言いますのも、私の卒業の年（年度では前年、即ち26年）に演劇部を

復活させ、プロデューサーの雑用をやった覚えはあるんですが、それが昭和26年の『三年寝太郎』で、佐藤先生を中興の祖として活動を再開してからが演劇部の第2世代で、今に続く流れの基だと思えます。そのとき演目、配役、演出等にタッチした覚えはありませんが、今日は仲間に入れていただければ幸いです。

司会 それでは富永さん、よろしく申し上げます。

富永 沖さんの一年後輩、高5回卒の富永でございます。昭和26年、私が2年生のとき、沖さんや七里榎さんたちのグループか



ら「今年の文化祭で『三年寝太郎』をやるのだけれど、寝太郎を引き受けないか」という打診がありましたが、私は現代演劇を見たこと

もなかったなのでその年のご辞退しました。その年は適役の故市川知道さん・七里さん・西片葵さんで演じたという経緯がございました。『高田高等学校百年史』にも書いてありますが、昭和26年は「女人禁制。男女一緒に演劇はまかりならん」という職員会議の方針で、花嫁は女形登場ということになりました。

翌年は佐藤先生のお勧めで田中千禾夫ちかおの名作『おふくろ』をやることになり、池主（旧姓麦谷）正子さんがおふくろさん、二期



下の吉川（旧姓小林）則子さんが妹の峰ちゃんを演じました。この年は、かなりの数の女性が参加しましたが、女人禁制を裏返ただけで、男は私一人だけというかなり不自由な舞台でした。もう1本、故高橋一夫さん主演で『ズーズー弁物語』というチェーホフの短編の翻案の芝居と2本立てでした。

その2年の実績が職員会議でも、謹厳実直な小和田校長も評価されたのか、3年目には3本立てになりました。『夕鶴』で池主正子さんがつう、池主保さんが与ひょうを演じて好評を博した舞台でした。その他に一人芝居『花子』を吉川則子さんが、また、かなり長くて大がかりな『祭り』を、1年前・2年前には想像もつかなかった3日間連続上演しました。あの講堂が満席になり、夜まで上演があったもので、学校の計らいで駅まで往復バスが出たくらいです。



佐藤春朗先生の「夕鶴」の台本。  
びっしりと書き込みがされている。

昭和26年の女人禁制から始まって、3年でよくあそこまでいったなと思います。当時、新潟高校、長岡高校、高田高校で大学進学を競っている時代でしたから、進学指導に熱心な某先生から呼び出されて、「2年

まではいいが3年まで演劇を続けたら浪人は必至だぞ」とお説教された記憶がありません(笑)。

**司会** 演劇部の草創期には、佐藤先生が積極的に関わっていただいたと伺っていますが、簡単にお話しただけでないでしょうか。

**佐藤先生** 現在も部があるというのを初めて聞きまして、感心しましたね。



私は昭和26年に高田高校に赴任しました。当時22、3歳で、生徒とそう変わらない歳でした。ここにいる沖君なんかもういましてね。こういう先輩諸君に啓蒙されて演劇に飛び込んだんじゃないかと思えますね。

家が寺だったので、昭和63年まで36～37年間高田高校におりました。その間を振り返ってみて、演劇部としての活動は、昭和26年から28～29年までで、その後は同好会はありましたが、部があったのかということ若い方に伺いたいですね。

逆に言うと演劇部や同好会がなかった時代のほうが、文化祭を通じて各クラスが芝居をやりまして、非常に熱気がありました。創作劇というのはなかなか出てこなかったですが、その頃のほうが生徒自らが芝居を作るという熱気があった気がしますね。そのような中から同好会のようなものが発足していったのかな、紙数がゆるされるならぜひ紹介してください。楽しみにしています。

**司会** ありがとうございます。佐藤恵子さん、お願いします。

## ■ 昭和末期：

## ミュージカル中心の同好会立ち上げ

佐藤恵子 高40回の佐藤恵子、旧姓小杉で



す。池主正子さんと私とで座談会に出席していただける方にお声かけをして、こうして世代を超えて先輩後輩とお会いできて感激して

います。

私は、演劇とくにミュージカルとつながりがございます。祖父が音楽家で、私の物心つくころには子どもたちが音楽を習いに来ていましたし、家にはいつも音楽が流れていて歌を歌ってばかりいた子どもでした。小学校のころによく上越にきていた劇団四季のミュージカルを観にいきました。

高高に入ったときは演劇部はなく、3年生のとき高高祭のクラスの創作劇で友人と私が脚本を書き、クラスメイトが演じました。一方で、有志が集まって演劇同好会を作りました。そこでやったのはミュージカルで、人形の館にいる人形達が夜になると人間のように踊り出す、というような内容のものを楽しくやらせていただきました。



同好会の練習風景。右から2人目が佐藤さん

大学は同志社大学で英語部に入って英語劇を、とくに『レ・ミゼラブル』などのミュージカルをやることになって、ミュージカル漬けの大学時代でした。その後、ご縁あって留学先もミュージカル本場のニューヨークの大学院に進みました。

そんなわけで私とミュージカルとは切っても切れないものです。今日はよろしくお願ひします。

**司会** 最後になりましたが、小池さんお願ひします。

## ■ 平成の演劇部 ― 再び黄金期へ

小池 高58回卒業の小池ちひろです。私が



入学した頃には、演劇部は存在していました。8～10歳上の方々が、4～5人の有志で同好会を立ち上げて『アイスブルー』という演劇

を演じ、上越の高校演劇の大会に出た結果、2つ勝ち上がりました。その成果で同好会から部に昇格することができて、黄金期を築きました。3～4歳上の方々の頃は黄金期と言えるくらい精力的に活動していて、その方々が文化祭で教室を使って上演したときのビデオも残っていて、私たちはそれを観て勉強しました。

私が1年生で入ったときには部員が少なく、1つ上の代が女性2人、私の代で最初10人入りしましたが、3人になりました。3年生は役者として表立って関わってはいなかったです。

「アイスブルー世代」は演劇部として活

動するだけでなく、劇団「ラクリツ」という名前を掲げて、雁木通りプラザや厚生南会館を借りて自主公演したそうです。私の世代の1～2年くらい前は演劇部の知名度は高くなかったのですが、同期の内田瑛子さんは行動力があり、それまでの商店街などへのポスター貼りに加えて、ポスター貼りをクラスメイトに頼むなどして宣伝し、演劇部の活動をクリアにして、イメージを刷新してくれました。

そのころの文化祭でも3年生がクラスの演劇を上演するというのが続いていて、演劇部が表だって頼りにされました。2つ上の兄も演劇部に籍を置いたことがありましたが、兄たちのころは文化祭の演劇はクラスのリーダー的な人たちが引っ張るものであって、演劇部だからといって頼りにされることはないように感じました。演劇部員は主要な役職には就けないのですが、その裏で演出について相談されたり頼りにされたのは、私たちの時代からです。

佐藤先生 小池さんは何年入学ですか？

小池 平成15年の入学です。

佐藤先生 お若いですねえ、私たちとは50年以上違うんですね(笑)。

### ■佐藤先生の赴任と演劇部の活性化

司会 『百年史』にも女人禁制のことなどが載っていますが、草創期のご苦労話をお願いします。

沖 たまたまそのとき七里君が生徒会長で、私が副会長だったんです。演劇に限らず、いろいろな生徒会の催し物を先生方と打ち合わせしたり交渉する場面で、今でも口調

を覚えています。平松もんちゃんこと、平松教頭先生から「日本の伝統的な演劇で、格式あるところは男性が女性を演じるものである。高島の演劇部でも守ってもらいたい」と口角泡を飛ばして言われたことがありました。それに対してこっちも青二才でしたが、「新劇とはそういうものではない」などと、佐藤先生から入れ知恵してもらったことを並べたてたことを覚えていますね。それが変化の糸口になったかどうか、その辺で関わっていたかなあという気はいたします。

富永 確か沖さんと七里さんたちで『インフェルノ』という同人雑誌をやっておられたんじゃないかと思うのですが。

沖 はい。そのころ変な名前をつけるのはやっています、1～2年上の方が『レスポワール』という同人雑誌を作っていて、それに対して、七里、林、私などが、「向こうが『希望』ならこちらは『地獄』でいこう」と『インフェルノ』という雑誌を作って、何かやろうとしていた覚えがあります。

富永 その人たちが『三年寝太郎』に深くかかわっておられて、そこに佐藤春朗先生が赴任されて、中興的に演劇活動が活発になったきっかけじゃないかと思います。

『百年史』を見ましたら、昭和24年に演劇同好会が発足していて、『ベニスの商人』をやり、24年秋の文化祭にはベルナル原作、岸田國士訳の『自由の重荷』と有島武郎の『ドモ又の死』を公演しています。25年は主力な部員卒業のため空白ですが、1年置いて26年秋の文化祭から活動が活発になったと書いてあります。ですから佐藤先生が

来られる前に2年間の演劇活動はあったんですね。沖さん、観ておられませんか。

沖 観ていません。ただ、空白と言われるときにも、我々より一年上の人たち数人が中心になり、翻訳ものの脚本を見つけてきて、読み合わせしたり議論したり、ということはありませんね。発表や公演にまでは至らなかった、と記憶しています。

佐藤先生 私も芝居やる前に『インフェルノ』に誘われましたなあ。あとき林君とか沖君とか、七里君、市川豊君がいてね、そんな関係で私も芝居に参加していくようになったのかもしれないね。

沖 そうだと思いますね。

佐藤先生 私の大学時代は50年安保の盛んな時代で『きけ わだつみのこえ』に参画していましたね。東京の大学に呼びかけて、早稲田の大隈講堂でやろうとしたら禁止になりまして、私が東大にいたものですから、安田講堂の近くで緊急にやったことがあるんです。私が芝居なんかに向くはずがない

んだけど、そんな関係で引っ張られたんじゃないかと思います。まあ『インフェルノ』に入りまして、芝居だということになって始めたんじゃないかな。あのころね、私の寺で人形劇もやっていましたね。沖君のお姉さんも参加していて。

沖 そうですね。佐藤先生を中心にフィロスという人形劇団があって、私の姉が仲間と一緒に先生のお寺でその活動をしていたので、そこによくもぐり込み、門前の小僧気取りでした。3〜4歳上の方たちの演劇論争を聞いていまして、面白いなあと思っていました。そんな関係で、先生に高高的演劇の声をかけたんじゃないかな。

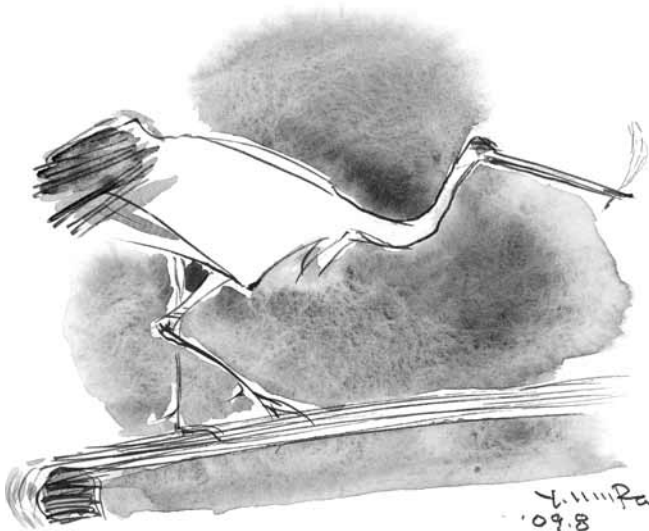
佐藤先生 演劇の練習場所は寺の座敷と本堂でしたね。学校じゃやらなかったね。だから、よほど小和田校長は心配だったんでしょうね(笑)。

## ■木下順二に惚れた

司会 先ほど日本の伝統演劇は男が女形をやるということがありましたが、今のような近代演劇が広がったのは戦後まもなくでしたか？

佐藤先生 そうですね。新劇が盛んになるのは戦後でしたが、戦前からありましたね。『三年寝太郎』で女性を使いたかったのだが駄目だということで、男性の館形博君だったかな、やってもらいましたね。まああの芝居は女形のほうが面白いということがありました。

あのころ、『夕鶴』の作者木下順二さんがもっていたんですね。彼



は英文学でシェークスピアの研究をしていた人で、シェークスピア的な構想で描いた作品が多いんです。私も大学でシェークスピアをやったもんですから、木下順二さんに惚れて『三年寝太郎』ということになったんですが、高校生には反逆的な作品でしたね。「勉強しちゃだめだ、寝てろ」っていうんだから（笑）。

60年も前だから記憶がほとんどないんですが、おととい図書館で『三年寝太郎』を借りてきたら、これが面白いんですね。寝太郎はワルだったんですね。七里君が寛太役で寝太郎にだまされ通しでした。あんなに面白かったのかと思いました。あれは本当にお客さんがたくさん来てくれましたよね。

佐藤恵子 どのくらい集まりましたか？

佐藤先生 講堂が満員でした。

佐藤恵子 すごいですねえ。

### ■すべて手作りの舞台だった

沖 あのこと何でもやりましたよね。音楽の植木先生に『寝太郎』のテーマ音楽の作曲をお願いし、歌代君に幕の裏から生でバイオリンを弾いてもらったり、写真屋の息子の田村君をおだてて照明をやらせて…。

富永 私が感心してよく覚えているのは、沖さんは絵がお上手でスケッチや油絵も描かれていて、舞台装置も沖さんたちの手作りで、感じのよく出ている舞台でした。衣装も手作りでしたね。

佐藤恵子 昔のこの写真を見るとリアルですね、この舞台。高校生のレベルじゃないですね。

富永 これみんな、沖さんの才能ですよ。

ポスターも沖さんの手作りですね。

沖 私絵画部にいましてね、絵というよりもデザインとかイラストとかに興味がありまして、学校中のポスターや看板を描きまくってましたね。舞



沖さんらによる看板の製作風景

台装置がやりたくて、佐藤先生に「こんな具合でどうでしょう」と持って行った覚えがありますね。

佐藤先生 あのこと幕はありましたか。

富永 映画の時に使うやつを引いた覚えがあります。黒幕だったかも知れない。

佐藤先生 スポットライトはなかったですよ。

沖・富永 写真屋から借りてきました。

佐藤先生 かつらはどうしました。

沖・富永 パーマネント屋のキマチ(未海)さんから借りたんじゃないかな、スタッフにいましたから。

佐藤先生 林君なんか、かつらを自分で作ったんじゃないかな。『夕鶴』の与ひょうがかつらじゃピンとこないよね。池主君、かつらだよ。あのころみんな丸坊主ですからね。

富永 破れ障子など、お金をかけないで本格的な小道具がありますね。お寺の納屋から借りてきたのかもしれないですけど。

沖 むき出しの梁を作ったりしましたが、



らないくらいでした。

**佐藤恵子** ドーランを塗ると、演劇をやるという気合が入る感じでしたね。

**小池** 私も大学に入って演劇をやったときにはドーランを使いましたが、気が引き締まる感じでしたね。

## ■女子部員の勧誘と小和田校長の心配

**司会** 創立80周年祭をきっかけに、その前から女性が入ったんですね。



小和田校長(前列中央)を囲んで

**佐藤先生** そのころの話が一番面白いですね。誰がどういう形で女性を引っ張ってこられたかわからないので、池主正子さんに伺っても忘れたとおっしゃるばかりで。

**富永** 私は水飲み場で5人くらいスカウトした記憶があります。池主正子さん、石黒<sup>のり</sup>経さん…。

**佐藤先生** 七里君は会長で、沖君は副会長でしたね。一年下の富永君は副会長でしたね。

**富永** 当時は生徒会役員の候補に挙げられて演説をするんですが、全員が「私はいかに向いていないか」という内容の演説で、辞退演説が一番上手だったのが会長になっていました(笑)。

**沖** 受験勉強で忙しくて、などという弁解が下手で副会長でした。

**富永** 『三年寝太郎』にしても、すでに始まっていた進学偏重に対する気持ちの表れ、『おふくろ』『祭り』『花子』にしても、現代物も時代物も時代の空気を表現したかったんでしょうね。

もう一つ、普段学校で勉強だけしている友だちづきあいでは味わえない、独特の仲間の雰囲気、特に女性と交際できることは大変なメリットだったんですね。共学の第1期生は女性20何人でしたよね。

**佐藤先生** 富永君たちの勧誘がうまくいったのか、集まったのはかなりの美人でしたね。それに釣られて、男子の連中もかなり入ったんだろうなあ。

**富永** 2年目はほとんど女性でしたよ。男は高橋一夫さんひとりでしたね。

**佐藤先生** 花子役をやった吉川(旧姓小林)則子さんに電話して聞いてみたら、「私は付属中時代に演劇をやって興味を持っていました。だから高高で声かけられたときに、知っている人を誘って入りました。今日初めて先生に言いますが、芝居終わって校長室に呼ばれて小和田校長にもう芝居しちゃいかんと言われました」って言うんですよ。小和田校長はハラハラしてみているんでしょうねえ。

**司会** 男女の交際が進みすぎることだったのでしょうか。

**佐藤先生** 私もその芝居の2年後に結婚しました。家の座敷のお披露目の席で小和田校長に「君、もう芝居やっちゃならん」と言われましたよ。

富永 復活してから3年目にバスが出るくらいの黄金時代を迎えましたが、その後また中断したのは、小和田校長の心配からだったのかな。

司会 そのバスはチャーターしたのですか。

富永 頸城自動車の特別チャーター・バスが3～4台で、父兄をはじめ一般市民の方を運びました。

佐藤先生 私なんかは大学時代芝居をやっていましたから違和感はなかったけれども、初めて見た人は高田高校が大変なことになったと思ったんじゃないですかねえ。3日続けて夜6時～9時、押すな押すなと市民の方がいっぱい来られて、高田高校から革命がおこるんじゃないかと心配されたんじゃないですかね。

## ■クリエイティブな時代へ

### －蒔いた種から花開く－

佐藤先生 佐藤さんのころは女性が多いですね。

佐藤恵子 はい。女性のリーダーがいて、その人に吸い寄せられるように演劇をやった感じでしたね。女性、しかも華やかな目立つ人が圧倒的に多かったです。そのころ1学年下の男子をスカウトして、同好会は昭和61年頃できました。

富永 佐藤先生がいらしたところですが、先生の指導は受けられなかったですか。

佐藤恵子 はい、自然発生的にやっていました。

佐藤先生 いや、指導どころか、あのころはすべてのクラスがクラス独自でやっていました。



佐藤恵子 そうなんです。あのころは本当に自由で、クリエイティブなことをやらせていただけの時代で、高高祭は3年生の演劇が盛んでしたね。毎年の体育祭でのチアリーダーも、セットを作って衣装もそろえて、どう盛り上げようかと話し合いました。

富永 私達が理想にしていたものが、ずいぶん時間をおいて実現したという感じですね。私たちは一粒の種を蒔いた？

佐藤恵子 それが「花開いた」という感じでしょうか。非常に自由な雰囲気でした。東京からの転校生が自然に人を引き寄せるリーダーシップを持つ方で、ミュージカルを彼女に教わったという感じでしたね。人を引き付ける立ち姿、発声などを全員に指導してくれました。

また、2年生のときクラスの有志で集まって8mmのビデオ撮りで創作劇をやりました。第四銀行のレンガのきれいな建物の前で恋愛模様を撮影したり、直江津の海辺で砂浜に好きな人の名前を書いて、それを波が消していくという振られる役のとき私には好きな人がいて、思わず泣いてしまったり…。本当に自由な時代でしたね。高田駅で電車に乗って去っていく、というシーンを撮りましたが、本数が少なくて失敗は許されないし、本当に乗って行ってしまおうし、大変だったのが印象に残っていますね。(笑)。

多感な時期で、私と演劇とは切っても切れないものでした。

沖 仲間の脚本ですか。

佐藤恵子 はいそうです。

富永 小和田先生が生きていらしたら、飛

び上がるくらい驚かれたでしょうね。そういう種は蒔かなかったなあ(笑)。

## ■創作劇の中で若々しさを活かす

富永 小池さんの時代、男生徒と女生徒の割合はどうでしたか。

小池 女性のほうが圧倒的に多かったです。

「アイスブルー世代」は男女半々、私の世代は女性が大半で男性が2人、下の代は女の子ばかりで、やっとな男性が1人入ったくらいで、女性が主力でした。

佐藤先生 確かに、そのころの男子は照れ臭がり、女子が中心になりますよね。

小池 はい。演劇大会に出ているほかの学校もそうでした。

富永 日本の社会も、今は女性主導ですからね(笑)。

司会 小池さんの頃はどんな雰囲気でしたか。

小池 自由度が高い中でやらせてもらいました。たまには恋愛のある脚本も上演していましたが、高校演劇というものとは違う、創作劇の中で若々しさを活かすものをやりました。高校生の悩み、ぶつかる壁、友情とか若さゆえの葛藤を描いたものや、文化祭など一般の方々が来られるときはコメディ一色が強いものをやりました。シリアス一辺倒ではなく、要所要所面白いシーンを入れました。

佐藤先生 小池さんの時代はオリジナルが多かった？

小池 そうです。やりたいテーマを持っている人が必ずいまして、その人が書き上げたものをみんなで検討しながらやりました。

他には「アイスブルー」を再演したこともあります。

富永 進学とか恋愛がテーマでしたか。

小池 進学というか、進路の迷いに関するテーマが多かったです。

司会 「アイスブルー世代」は8歳くらい上ということですが、どういうものを行ったのでしょうか。

小池 佐藤さんの世代に近いものを感じますね。演劇同好会の人が生徒会幹部になって、権力を使って予算をもぎ取った感じでした。

司会 それは沖さん富永さんの頃と同じですね。

小池 そうですね。芝居にとりこまれているものが会話だけでなく、ダンスがあったり、群読を入れたり、いろいろな要素を取り入れたのも「アイスブルー世代」です。部室がなかったので、公園でダンスを練習したり、公民館を借りて稽古したと聞いています。

司会 昭和20年代の草創期とは、自由のレベルが全然違いますね。

佐藤先生 どちらも背景にあるのは、上から押し付けられたものでなく「自分たちのものは自分たちで」というマグマがなければとてもできませんね。佐藤さんたちのころは、そういう時代だったかもしれないな。

その後三無主義というのが蔓延して、そういう中であって、自治活動を盛り上げるには、演劇とか同好会とか文化祭とかで

盛り上がったんですね。生徒会長が言う言葉は「派手にやろうぜ」ということ、派手にやればみんなの気持ちが盛り上がってくると。佐藤さんのミュージカルなんかは、最先端なんじゃないかなあ。男子が女の格好をして踊ったのがありましたよね。

佐藤恵子 おにゃんこクラブが流行っていたころですね。

### ■学校の外にも目を向け始めた演劇部

司会 小池さんの後輩の方たちは、いまでも夏季公演のポスターなどを街に貼っていますか？

小池 今やっているかどうかわからないですね。2～3年前高校演劇に熱心な先生が赴任していらして、高校演劇の大会で上位を狙うような傾向があるようで、自主公演はわかりません。2008年には県大会に出ています。

佐藤先生 平成になってからの演劇部は文化祭だけでなく、独自の企画をして学校を会場にやりましたか？



小池 学校では設備が少なくでできないので厚生南会館でやりました。観客は1回で80人ほど、3回くらいやりました。無料公演でした。

佐藤先生 宣伝はどうしていたの。

小池 先ほどの内田さんがポスターやチラシを手作りして、高田の商店街や駅をお願いして貼ってもらいました。学校内にも貼って宣伝しました。

司会 学校行事としての演劇と自主的な演劇の違いについてお聞きしたいのですが、草創期は、学校の行事としての演劇と切っても切れない関係にあるように思いますが、いかがですか。

富永 文化祭がなかったら、ぼくらの演劇活動はなかったですね。

沖 文化祭だから、と父兄の理解もあったのでしょうか。

司会 佐藤恵子さんの時代はどうですか。

佐藤恵子 基本的には自然発生的にできた演劇同好会でしたけれども、発表の場は高高祭のときに3年生のクラス演劇と合わせて発表しました。

司会 小池さんのときは？

小池 そこは全く違いますね。文化祭は3年生が演劇をしましたが、文化祭で部活動が舞台を使用することは禁止でした。軽音楽部とか合唱部とか器楽部とか、ステージを使いたいであろう部が他にもありましたからね。演劇部は2年1組の教室を使っていました。

ですから、精力的に活動するには外部の大会だったり、新井の演劇フェスティバルに参加したり、学校外での自主公演という

のが圧倒的に多かったです。

司会 外部での大会とか高校演劇祭などは、昔からありましたか？

沖・富永 記憶にないですね。

富永 コンクールというのは、もう少し後の時代ですね。

私が北海道で新聞記者をしていたとき、昭和50年代半ばに演劇の地区大会の審査員を頼まれましたが、全道大会、全国大会までありました。その頃の高田高校がどうしていたかは知りませんが。

司会 佐藤さんの時代はどうでしたか。

佐藤恵子 いえ、あまり聞きませんでした。

富永 行政が支援してお金を出してくれないと、広域的なものではできないですね。北海道は教育委員会が相当お金を出していました。そのかわり、教育的見地から超健全な内容のものでないといけなかった。水準はわりに高かったです。そのとき、私達が高田高校でやったものは、相当水準が高かったなと思いましたよ。

司会 それぞれの時代のご苦労話を聞かせていただいてありがとうございます。そこで、例えば「仕事とは関係なかったけれど物の見方に影響している」など、皆さんの人生にとって演劇とは何だったのかをお聞かせください。

## ■演劇に関わって、物事をまとめる力が役に立った

沖 さあ、困ったね。私にとって演劇は応援団であり、野次馬であり、雑用係であり、周りから関わったものですからね。ただ、先輩になると口を出していましたね。富永

さんの世代とも違って、女子とのかかわりが本当にない時代でした。演劇自体に興味はありましたが、演劇部に所属して一緒にやることはなかったね。卒業してからは、芸能関係に携わることはなくなりました。

ただね、演劇に関わって、物事をまとめる力が役に立ったなと思うことがあります。海外のプロジェクト遂行で、物がそろわぬ時はある物で間に合わず、また、交渉する相手の抵抗があるが何とかせにゃいかんというときに、物事をまとめて人を説得して仕事を完成させるという態度が学べた点等は、役に立った気がしますね。

## ■ 演劇活動は自分の進路を決め、今は生きがいとなった

富永 私にとって『おふくろ』の主演英一郎は興味のある役でした。当時高田高校の体操を全国銘柄にした加藤信治先生が、『おふくろ』が終わった直後に、生徒の前で細かく好意的な批評をしてくださいました。



「おふくろ」の舞台

私の演技についても細かい批評をしてくださいました。饒村義治先生も社会の時間に細かく批評して下さったことが、高時代にもその後を通じて励ましになりました。

た。

高校3年の時、受験勉強が嫌いで学校を休んで図書館で本を読んでいたんですよ。佐藤先生が雪の中を家まで訪ねて来られて「このままじゃ授業日数不足で卒業できないよ」と言ってくれました。先生のお陰で卒業・進学ができたんです。演劇を通じて、先生のお陰だったと思っています。

新聞記者になってからは、たまに観るくらいでしたが、人の前で話をしたり人前で何かをやることへの抵抗感が薄れていきました。同期の故丸山祐二さんから北海道新聞の論説委員だった私に「ある講演会の講師にドタキャンされたから、誰か推薦するか、誰もいなかったらおまんやんない」と頼まれて、2,000人くらいの前でわか勉強で講演をしたこともあります。もともと度胸のいいほうじゃなかったんですが、演劇のお陰でそんなこともやらせてもらいました。

リタイヤしたあとは、調布の図書館でブラインドの方に朗読をするボランティア活動を7～8年続けています。テープに吹き込んだり直接朗読することがありますが、その原点も高時代の演劇だと思います。私の生きがいの一つです。

## ■ 演劇は「私らしさ」が最も生かされるもの

佐藤恵子 私らしさを最も表現するものが演劇だと考えています。先ほどお話ししたようにもともと音楽家の家だったので、気がつくとき歌を歌っていました。小学校のころ人形劇の脚本を書いたり、歌も作っていました。

留学したとき、日本の大学からアメリカの大学院にいくと、言語の面ではネイティブの方とは差があっても、プレゼンテーションのときには言葉の壁を乗り越えて、表を使ったりアイコンタクトを使ったりして生きながらえたのは演劇のおかげかなと思います。

今キャリア開発のコンサルティングをしています。自己分析を徹底的にやって明らかになったのですが、私は自由に考えたものを表現し伝えたいタイプで、このときに演じることが色濃くでています。以前企業でコンサルティング営業をしていたとき、お客様に一番いいと思われるものを分析してプレゼンテーションをする。そこではアドリブも必要なのですが、演劇の経験が非常に役立ちました。

おととい（7月2日）は上越市で講演をさせていただきました。緊張感はあるけれどいいと思うものを皆さんにお伝えする工夫が楽しいですし、見ていただいた方に「わかりやすかった」「ためになった」と言っていただけることが嬉しいです。

今そういったお仕事をさせていただいており、演劇に関しては私らしさが最も生かされるものだと思います。今後も演劇の経験を活かして仕事を続けていきたいと思っています。

そして、若い方に演劇をやってほしいなと思います。目的に向かって、仲間が協力し合うことが必要ですし、演じることが社会人になってから役に立ちます。

## ■ 演劇は一生関わり続けるもの

小池 演劇は一生関わり続けるものであると思っています。中学時代に芝居に興味があって入った演劇部だったので、経験を積んで人前で何かやることに対する抵抗が薄れました。総合的な学習でプレゼンテーションをすることも多かったし、学年で3人選ばれて1年生の妙高合宿に一緒に行って、プレゼンをしたことがありました。他にもたまたま居合わせて、1年生のプレゼンテーションを聞いた上でその講評をすることもありました。

大学のサークルも演劇で、3年生のころからプロの演技指導も受けています。現在でも舞台に立ちたいという思いがありますし、1か月に5～6本小劇場のお芝居を観ています。いま4年生で、就職の内定も一ついただいているのですが、演者としての夢も捨て切れない。一生何らかの形で舞台に立っていたいという気持ちもあり、人生の中で一番太い道も決めかねないもので演劇との出会いは衝撃的であり、一生関わっていきたいものです。

また、子どものころからお芝居を通して人とコミュニケーションをとるということに関心を持ってほしいですし、他人との気持の応酬を学ぶことの一つの手段として、演劇を使えるといいなと思っています。

司会 ありがとうございます。半世紀以上世代を超えた人たちからのお話をお聞きになって、木下順二から創作劇までとジャンルは違いますが、佐藤先生の目から見た演劇の魅力をお話しいただければありがたいです。

### ■ 演劇は私にとって青春であった

佐藤先生 現在81歳ですが、この座談会を機会に古い日記などを読みなおして若返りました。演劇は私にとって青春であったなと思います。教師になって生徒と一緒に携わり、いろんな重みが加わり感謝しています。この活動に参画していなければ、人生って何だったのか、考えざるをえないです。私が教師という立場じゃなくて、同じ若者的な感覚で昭和20年代の作品に参画したということが誇りに思っている次第です。

反面、もうちょっと大人の目で演劇活動を指導すればよかったのかもと考えてもいます。当時の日記を「ガラクタ日記」と呼んでいるのですが、そのころ生徒にかなり影響したのじゃないかなと、反省もしているのです。だいたい娑婆の生活で演劇活動

や文学活動はガラクタ活動なんじゃないかと思っていますが、私の青春時代だったなと矛盾をしながら迷っているところがございます。

私が昭和63年に学校を辞めるときに、高校時代の自分たちの悩みを表現して創作したすばらしい作品があったらあげてくれと、生徒会にトロフィーを置いてきたのですが、創作劇はあまりないらしいと聞いていました。ところが、今日の話では、平成になるとそんな話があるようです。創作とは大変なことですが、生徒達が自分の心を見つめて作品を発表できるのは素晴らしいことだと思います。

司会 本日は深みと広がりのある貴重なお話をありがとうございました。

